



Title	<翻訳> 蛇舌グンラウグの物語(2)
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 1974, 31, p. 83-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80521
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

蛇舌グンラウグの物語 (2)

菅 原 邦 城・訳注

GUNNLAUGS SAGA ORMSTUNGU (2)

Translated from the Old Icelandic with notes

by Kunishiro Sugawara

X. さて、グンラウグについては、こう言われている。フラヴンがアイスランドに向った夏に、かれはスウェーデンからイングランドに向ったが、別れに際してオーラーヴ王から見事な贈物を与えられた。アザルラーズ王はグンラウグをこの上もなく歓迎し、かれは冬の間大いに重んぜられて王の許にあった。¹

この頃デンマークは、スヴェインの子クヌート大王が支配し、かれは新たに父の遺産を継いだところであった。² 彼はたえずイングランドに侵寇すると脅かしていた。というのも、西の方イングランドで息をひきとる前にかれの父スヴェイン王がイングランドで大きな領土を獲得していたからである。またその頃西の地にはデンマーク人の大軍があって、その首領はヘミングといい、〈尖り帽子の〉ハラルド公の息子で、シグヴァルディ公の兄弟であって、³ 彼はクヌート王の下で、スヴェイン王が以前獲得した国を治めていた。

春にグンラウグは、王に旅に出る許しを求めた。

王が答える、「そちがわが近侍であるからには、今ここイングランドで起ろうとしている戦さのため、わが許より離れてゆくなど、そちには似つかわしくない」

グンラウグは答える、「御意のままに、陛下。もしデンマーク人が来ませんでしたら、夏に旅立つ許しを賜りますように」

王が答える、「その折に考えるといたそう」

こうして、その夏は過ぎ、つづく冬も過ぎて、デンマーク人はやって来なかった。そして真夏すぎにグンラウグは王より旅立ちの許しを得、そこからグンラウグは東の方ノルウェーに向い、スラント Heim のフラズィルでエイリーク公に会った。⁴ 公は今度はかれを歓迎し、自分のもとに滞在するように勧めた。グンラウグは公に招待の礼を述べて、まず自分の婚約者に会うためアイスランドに帰りたいと語るのであった。

公が言った、「アイスランドに向う船は全部、もう出てしまっているぞ」

その時ひとりの近侍が言った、「〈厄介詩人〉ハッルフRez⁵ が昨日アグズィ岬⁶ の下に船を停めておりました」

公は答えて言う、「そうかも知れんな。彼はここを5晩前に発ったのだ」

それからエイリーク公はグンラウグをハッルフRezのところへ送らせ、ハッルフRezは彼を迎えて喜ぶのであった。沖にむかう追風が出て、かれらは上機嫌だった。それは、夏の終りであった。

ハッルフRezがグンラウグに言った、「フラヴン・オヌンダルソンが〈麗しの〉ヘルガにした求婚のことを聞いているか」

グンラウグは、聞いてはいるが詳しいことは知らないと言った。ハッルフRezは彼に、自分の知っていることを話し、多くの人がフラヴンはグンラウグに劣らず勇ましいと語っていることも聞かせた。そこで、グンラウグが詩を詠んだ――

我はさほどに気にはせず
今週こち（東風）の
激しく船にたわむれしも、
空 いまや穏やかなり。
髪しろきまで生命ながらえざるより
我をフラヴンにひとしく
勇しきとはせぬ
言の葉を我はさらに恐れん。

ハッルフRezは言った、「仲間よ、フラヴンとのことはあんたの場合に、わしの場合よりももっとうまくいくべきだったのに。わしは5年前船で〔モスフェル〕荒原の下のレイラ湾に入り、フラヴンの使用人に銀半マルクを支払わねばならなかったが、払いはしなかった。だがフラヴンはわしらの所に60人をつれてやって来て、錨綱を切った。船は泥の干潟に押上げられて、難破せんばかりになった。結局わしは、フラヴンに一方的裁断を認めざるを得なくなって、1マルク払った⁷――これが、あいつについてわしが話せることだ」

それから彼らはヘルガのことばかり話しあい、ハッルフRezは彼女の美貌をととてもほめた。グンラウグはその時この詩を詠んだ――

剣をふりまわす者⁸の
リンネルをまといし女^{ひと}と
仲むつまじくすることは
叶わぬことぞ。
なにゆえならば
我は若かりしころ

かの女の指にて
たわむれしため。

「これは見事な出来ばえだ」とハッルフRezが言う。

彼らは冬になる半月前に北の方メルラッキ平原⁹のフラウン港に上陸して、船の荷をおろした。

ソールズという男がいた。彼は、その平原の農民の子であった。彼はその商人たちと相撲¹⁰をとったが、かれに彼らはかなわなかった。そこで、彼とグンラウグが取組むことになった。その前夜、ソールズはソール「神」に自分の勝利を祈願した。当日二人はあうと、相撲を始めた。そのときグンラウグがソールズの両足を払い、ドサッと相手を倒した。しかしグンラウグが重心をかけていた脚の関節がはずれて、彼はソールズといっしょに倒れてしまった。

その時ソールズが言った、「他のことならば、もっと上手にはできないだろうが」

「それは、どういうことだ」とグンラウグは言う。

「フラヴンとの一件よ。もし彼が冬入りの日に麗しのヘルガと結婚すればな——俺はこの夏、そのことが決められたとき、大民会に居合わせていたんだ」

グンラウグは、何とも答えない。そして脚に綱帯がまかれて関節は接ぎなおされたが、恐ろしく腫れあがった。

グンラウグとハッルフRezたちは総勢12名で出かけ、ボルグでひとびとが祝言の座についていた土曜日の夕方、南の方ボルグ峡湾のギルスバッキに到着した。イッルギは、息子のグンラウグとその旅仲間を迎えて喜ぶのであった。その時グンラウグが、すぐボルグに行くつもりだと語った。イッルギは、それは賢くないと言い、グンラウグ以外の皆もそう思った。しかし、グンラウグはその様子を見せはしなかったけれども、脚のために体が利かず、それでボルグ行きは実現しなかった。

次の朝、ハッルフRezはノルズ川谷 (Norðrárdal) のフRezヴァトン¹¹のわが家に向った。そこでは彼の兄弟ガルティが兄弟の財産を管理しており、この男は勇敢であった。¹²

1 1004—05年の冬。

2 Knútr inn ríki Sveinsson は、英国史でいう Canute (c. 995—1035)のこと。父王 Sveinn tjúguskegg Haraldsson の後を継いで英国征服を完成させ (1016年)、更に Óláfr Haraldsson 王を破って南ノルウェーを獲得する (1028年)。本文では、スヴェイン王が 1004—05年に没したかのように述べられているが、これは史実に合致しない。王は1014年に死亡し、その子 Haraldr がデンマーク本国を、同じくクヌートがイングランドを相続したのである。ハラルドが没した1018年にクヌートはデンマーク本国の王位をも襲い、こうして1030年前後の一時期、デンマーク史上に北海帝国の一ページを加えたのである。

3 Hemingr Strút-Haraldsson 東部デンマークの支配者ハラルドの子で、ヨームスボルグ首領 Sigvaldi jarl の弟 (cf. *Jómsvíkinga saga*, London 1962 [Nelson's Icelandic texts], ch. 26)。彼は、Florence of Worcester (1009) にデーン人侵入軍の指導者として挙げられている Hemming dux

Danorum なのかも知れない (cf. *ibid.*, 28 fn. 1)。この二人の間には更に, Þorkell inn hávi という兄弟がいる (cf. *ibid.* pass.)。

- 4 1006年晩夏。
- 5 Hallfreðr vandræðaskáld は, Óláfr Tryggvason 王などノルウェーの支配者の宮廷詩人として有名。彼については, 特に *Hallfreðar saga* (ÍF VIII) をみよ。
- 6 Agðanes は, ノルウェー中部 Trondheimsfjorden の南側口にある岬 Agdenes のこと。
- 7 *Hallfreðar s.*, ch. 11 によれば, この争いは, ハッルフRezとグンラウグがアグザネスで出会う前年の事件になっている。この争いが *Hallfr. s.* にオリジナルなものであれば, 後に *Gunnl. s.* に借用されたとしていいだろう (cf. ÍF III, Formáli 1, ÍF VIII, Formáli lxii f.)。
- 8 「男」のケンニング。ここでは, 特にフラヴンを指す。
- 9 Melrakkaslétta は, アイスランド東北端の最北にある大きな半島で, Qxarfjörðr の東に広がる。Hraunhöfn は, その北東部にある港。
- 10 glíma 今でもアイスランドで好まれているスポーツ。主に足技を使い, 相手を倒せば勝ちとされる。Cf. KLN M V, 357 ff; Björn Bjarnason, *Íþróttir fornmannna á Norðarlöndum*, Reykjavík 1950², 143 ff.
- 11 Hreðuvatn ボルグ峡湾 Norðrá 中流西側にある同名の湖東北岸に位置する農場。
- 12 Galti は, *Hallfreðar s.*, ch. 10 によれば, 1001年に殺されている。これを正しいとするならば, 本文の記述はアナクロニズムとせざるを得ない。

XI. さて, フラヴンについては, こう言われている。彼はボルグで自分の祝言の席についていたが, 多くの人の話によると, 花嫁はかなり元気がなかったという。「若い頃に知ったことは長く忘れられない」と云われているのは本当で, そのとき彼女もそうだった。この宴で, スヴェルティング (Svertingr) という名の, モルダル=グヌープの子〈雄山羊〉ビョルン (Hafr-Björn) の子である男が, ソーロッドとヨーフリーズの娘フーンゲルズに求婚するという出来事が起った。そしてその結婚は, 冬にスカーネウ (Skáney) で冬至がすぎてから行われることとされた。そこには, フーンゲルズの親戚でトルヴィ・ヴァルブランドソンの息子ソルケルが住んでいた。トルヴィの母は〈トゥングアの〉オッディの姉妹ソーロッドだった。¹

フラヴンは妻のヘルガを連れて, モスフェルのわが家に帰った。ここに彼らがしばらく住んでいた時, ある朝に床を離れる前, ヘルガは目をさましていたが, フラヴンは眠っていて安眠できない様子だった。そして彼が目をさますと, ヘルガはどんな夢をみたのか尋ねるのであった。そこでフラヴンが詩を詠んだ――

我は夢みぬ, 剣をもて
なれが腕にいだかれつ斬られしを,
花嫁よなれが褥は
わが血にて赤く染まりぬ。
杯が女神なる女は
フラヴンが傷を

手当てせざりき

そはかの女をば喜ばしめん。

ヘルガは言った、「それを〔聞いても〕泣き悲しむなど絶対しないでしょう。あなたたちは私をひどく欺いたのですし、グンラウグが帰ってきたに違いありませんわ」

そしてヘルガは、激しく泣くのであった。

すこし経ってから、グンラウグの帰国が伝えられた。それでヘルガは、フラヴンが彼女を家にひき留めておけなくなった程かれに大変きつく当った。それで、彼らはまたボルグに戻ることであり、フラヴンは満足に彼女と夫婦生活もできなかった。

さて、人びとは冬の祝言にでる仕度をしていた。スカーネユのソルケルは、黒髪のイッルギと息子たちを招いた。そしてイッルギが準備をしている時、グンラウグは居間にいて仕度をしなかった。

イッルギが彼のところに行って言った、「息子よ、どうして仕度をしないのだ」

グンラウグは答える、「出かける気がありません」

イッルギが言った、「息子よ、是非とも出かけねばならんぞ。ひとりの女でそんなに思いつめるな。知らない振りをしている。おまえは女に困ることはあるまい」

グンラウグは父親のいう通りにして、彼らは祝言にやって来た。イッルギと息子たちは上座にすえられたが、ソルステイン・エギルスンとその婿フラヴンと花婿側のひとはイッルギの向い側の上座につけられた。女たちは高座に坐り、麗しのヘルガは花嫁のとなりに坐っていて時おりグンラウグに視線を走らせ、「女が男を愛せば、目は黙っていない」と諺に云うようになったのである。その折にグンラウグは立派な装いをしていて、スィグトリュグ王がかれに与えた見事な服をきていた。彼はそのとき多くの理由で、力や美貌や風采のために、他の男たちよりもはるかに優れていると思われていた。

ひとびとはこの祝言で大して楽しまなかった。そして男たちが引上げる仕度をした日に、女たちも解散しだして家に帰る準備をした。その時グンラウグはヘルガのところへ話しに行き、かれらは長いこと話をするのであった。その折にグンラウグは詩を詠んだ――

蛇が舌には天の下

一日とても安らかなるはなかりき

なにゆえなれば 麗しのヘルガ

フラヴンが妻ちょう名をば得しがため。

女の父なる色しろき男

わが言のはに さばかりも心をとめず

杯の女神なる女は若くして

かね故にめあわせられり。

そして彼はさらに言った――

美しき 葡萄酒の女神なる女よ――
かの女は詩人が喜びをうばいぬ――
我はなが父母に
いと悪しくむくゆべし。
なにゆえなれば二人はともに
かく麗しき女をば
夜具が下にてつくりしために、
悪魔の 男と女が傑作を奪わんことを！

そしてこの時、グンラウグはヘルガにアザルラズ下賜のマントを与えたが、それはきわめて貴重な品であった。ヘルガは彼に贈物の礼をよく言った。

それからグンラウグは外に出たが、雌馬や雄馬がもう鞍を置かれていて、その多くは見事な駒であった。馬は屋敷前の石敷につながれていた。グンラウグは1頭の馬の背に跳びのり、全速力で屋敷畑を横切り、フラヴンの立っている方へ駆けていった。それでフラヴンは身をひかなければならなかった。

グンラウグが言った、「退くことはないぞ、フラヴンよ。今のところおまえを脅かしはしないからな。だが、自分がどんな報いを受けられるようなことをしたか知っているな」

フラヴンは答えて、詩を詠んだ――

剣の神なる戦士よ
たたかいの女神に誉れをあたうるものよ
ひとりの女がゆえに我ら
仲わるくなるはよからじ。
戦いのひとよ
南のかた海のかなたに
かく美しき女は数しれず
そを船の長なる我はよく心えり。

グンラウグが答えて言う、「沢山いるかも知れないが、わしにはそうは思えない」

その時イルギとソルステインが駆けつけて、二人に争そわせようとはしなかった。

そこでグンラウグが詩を詠んだ――

黄金が女神なる女はかねゆえに

われに劣らず等しきものと
人のいうなるフラヴンに与えられたり。
さりながら いと猛きアザルラズ
剣がざわめきの中にありて
わが東より旅立つを引きとめにけり、
そがゆえに気前よき者
あまり物いう心地にあらず。

そしてこの後、双方とも自宅に帰り、冬の間すべて穏やかで何ごとも起きなかった。グンラウグとヘルガが会ったときから、フラヴンは彼女と夫婦関係がもてなかった。

さて、夏にひとびとは大勢で民会に出かけた。² 黒髪のイッルギと息子のグンラウグとヘルムンド、ソルスティン、エギルスソンと息子のコッルスヴェイン、モスフェルのオヌンドと息子みんな、雄山羊ビョルンの子スヴェルティング。スカプティが当時まだ、法の宣言者の任にあった。

民会における或る日のこと、ひとびとが多数〈法の岩〉に集まっていた、裁判が終了したとき、グンラウグが発言をもとめて言った、「オヌンドの子フラヴンはここに居るか」
彼は、来ていると言った。

そこで蛇舌のグンラウグが言った、「おまえは、自分がわしの内々の許嫁を自分のものにして、わしとの仲違いのきっかけを作ったのを承知しておろう。そのため、わしはおまえに、この民会の場で3日後斧ヶ川島で³ 決闘することを申しこみたい」

フラヴンは答えて言う、「おまえからならば予想されたように、これは立派な申し出だ。おまえの望み次第いつでも、わしは喜んでこれを承知だ」

このことは彼ら両方の身内には不吉に思われはしたが、他人のため不公平に取扱われたと思う者は決闘を申しこむことができるという法が当時あったのである。⁴

そして3日たつと、彼らは決闘の準備をして、黒髪のイッルギは大人数を連れてわが子に同伴したが、フラヴンには法の宣言者スカプティと父親と他の身内が島へついて行った。

グンラウグは島に出かける前に、この詩を詠んだ――

今われは抜身をさげつ
万民が原なる洲（しま）に
出でゆく仕度ととのいぬ、
御神よ 詩人にさちをば授けたまえかし。
ヘルガが情人の
こうべをば二つに斬りわらん、
ひかり輝やくやいばもて身体より
その頭蓋骨をば切りはなさん。

フラヴンが答えて、この詩を詠んだ――

詩人は知るよしもなし
いづれなる詩人が勝ちをむかえんか、
ここにやいばは抜かれてあり
やいばは脚にむかう仕度ととのいてあり。
我がたとい傷をうくるとも
胸かざりの留針が金板なる
わかき乙女はひとり寡婦（やもめ）にて
民会よりおのが夫（つま）のますらおぶりを耳にせん。

ヘルムンドが兄弟グンラウグのために、雄山羊ビョルンの子スヴェルティングはフラヴンのために盾をもった。負傷した者は銀3マルクでわが身を決闘から自由にできるとされた。⁵

フラヴンが決闘を申しこまれたので、まず彼が斬りかからねばならず、⁵ 彼はグンラウグの盾の一番うへの個所に斬りつけたが、その一撃は大変な力をこめられていたので、剣がその場で鏝^{つに}のしたで折れてしまった。剣先が盾から飛んでグンラウグの顎に当って、かれは一寸したかすり傷を負った。

すぐに彼らの父親と他のもの多数が、なかに割って入った。

そこでグンラウグは言った、「フラヴンが素手になったからには、やつが負けたのだ」

フラヴンが言う、「しかし手傷を受けたのだから、おまえが負けたのだ」

するとグンラウグは猛烈に怒って腹をたて、この決闘はまだけりがついていないと言うのであった。彼の父イルギが今はこれ以上やるべきでないと語った。

グンラウグは答えて言う、「父上、あなたがわれらを分けられないほど遠くにおられるようにして、自分とフラヴンは次にあいたいものです」

今はこのようにして彼らは別れ、みんな自分の民会小屋に戻った。そして翌日立法会議において、決闘はその後は一切禁止することが法律で定められた。これは、その場に居あわせたきわめて賢明な人々すべての勧告によってなされたが、そこには、この国でもっとも賢明なひとびと全員がいたのであった。したがって、フラヴンとグンラウグが闘ったこの決闘は、アイスランドで行われた最後のものであった。⁶ この民会は、ひとが最も集った三民会のひとつで、他のはニャール焼殺後の民会⁷ であり、第三のは荒原殺人事件後の民会⁸ である。

ある朝のこと、ヘルムンドとグンラウグの兄弟が顔を洗いに斧ケ川にゆくと、対岸で多くの女が川に近づいてき、その一団のなかに麗しのヘルガがいた。

その時ヘルムンドが言った、「川向うに恋人のヘルガが見えるだろう」

グンラウグは答える、「いかにあ^{ひと}の女が見える」

それからグンラウグはこの詩を詠んだ――

かのひとは人の子らが争いの
種にならんと生まれけり、
戦士がその因となれり
我はそのひとを得んものと命をかけぬ。
白鳥のごと美事なる
黄金が女神の女をば
くろき瞳の見やること
もはや我には益もなし。

その後かれらは川を渡って行って、ヘルガとグンラウグはしばらく話をした。そして彼らが川をわたって東の方に戻ると、ヘルガは長いことグンラウグの後をみつめているのであった。その時グンラウグは川ごしに見やって、この詩を詠んだ――

リンネルまとう
女（ひと）の睫毛が月は
明（あか）き眉の天より
鷹が目のごと
わがうえに輝けり。
されどその後かのひとが臉の星の
かの輝きは われとかの女の
苦しみをまねきぬ。

このことが終わってから、人びとは民会から家に帰り、グンラウグはギルスバックのわが家にあった。ある朝のこと、彼が目をさますと、みんなは起きてしまっていて、彼だけが寝ていたのだった。かれは高座のいちばん奥の床の間に休んでいた。そのとき、全員完全に武装した男12人が入ってきた。オヌンドの子フラヴンがやって来たのであった。

グンラウグは直ちに飛びおきて、自分の武器を手にする事ができた。

その時フラヴンが言った、「おまえは何の危険にもさらされておらん。わしがここに出むいてきた用件は、いま聴かせてやる。おまえは夏に大民会で決闘を挑んで、そのけりがつかなかったと思ったな。そこで、おまえに申入れたいことがある。それは、わしら二人がこの夏アイスランドを出て外国にゆき、ノルウェーで決闘をしようということだ。あそこなら、わしらの身内は邪魔をせんだろう」

グンラウグは答えて言う、「男らしい言葉だ、フラヴン、その条件を喜んで承知しよう。ここで、おまえの望み通りのもてなしを受けていったらいい」

フラヴンが答える、「それはありがたい申し出だが、今度はまず暇する」

そして彼らは、このようにして別れた。

このことは彼ら双方の身内にはことさら不吉に思われたが、かれら本人の激しさのために、何もできはしなかった。結局、運命の定めは避けられないことになっていたのだ。

- 1 AM 557 *Móðir Torfa var Þórdís, dóttir Tungu-Odds* [トルヴィの母は、トゥングアのオッドの娘ソールディースだった]。 *Landnámabók* (ÍF I₁, 74) によると、Þórodda は Tungu-Oddr の姉妹で（ふたりの両親は、Qnundr breiðskeggr Úlfarsson と Geirlaug Þórmoðardóttir）、Torfi Valbrandsson の妻である。
- 2 1700年の大民会。
- 3 Qxarárhólmr 大民会が開かれた広原 Þingvellir を南北に流れる川 Qxará にある砂洲の島。大民会で申込まれた決闘は、この島で行われるのが慣習であった。
- 4 決闘が法律であったか、それとも慣習であったかについては、専門家の説は分かれている。近年の傾向としては、これを慣習とする考えが有力である。いわゆる決闘法は、サガが多く記録された13世紀の騎士道趣味にその文学的起源をもつ考えであったと思われる。Cf. Lav Bø, *Hólmunga and einvígi, in Mediaeval Scandinavia* 2:1969, Odense 1970, 133–148.
- 5 同じ規定が、*Kormáks s.*, ch. X (ÍF VIII, 238) のいわゆる決闘法にも含まれている。
- 6 この決闘がアイスランド最後の合法的決闘であったことを傍証する史料は、未だ知られていない。ただアリによると、法の宣言者就任後（一般に1004年か1005年のいずれかと推定される）スカプティ・ソーロッドソンが第五裁判所法（*Fimmtardómslög*）を定めて、殺害者が私闘のために行った殺人行為を、すでに乱用の弊害があったと思われる決闘によって正当化できないようにした（cf. *Íslendingabók*, ÍF I₁, 19）。この新設の第五裁判所（*Fimmtardómur*）は、既存の4 地方裁判所（*Fjórðungsdómur*）に対して控訴裁判所としての性格を有し、全判事の意見一致による判決を原則とする地方裁判所とは異って、多数決制を採用した。（これは時期的には、キリスト教採用とも関連すると思われる。）スカプティを中心とする有力者たちが、この第五裁判所の活用という平和的手段をとって、決闘を廃止せしめたことは大いに考えられる。
- 7 *Brennu-Njáls saga*, ch. 137 によると、ニャール焼殺後（1001年か1002年）の大民会には「国のすべての地方から首領たちがやって来、ひとびとが記憶していた限りでは、[大] 民会は以前に同じほど多数のひとの集ったことがなかった。」（ÍF XII, 363）
- 8 *Heiðarviga saga* では、*Gunnl. s.*, *Brennu-Njáls s.* にみられるような直接的な記述は見当たらない。しかし35章に、「バルズィは民会の中日水曜日に900人 [= 1080人] を伴って法の岩に行き……」（ÍF III, 315）と述べられている。

XII. さて、フラヴンについて、彼はレイラ湾で自分の船の仕度をしていたと言われている。フラヴンに同行した2人の男の名が知られており、それは彼の父オヌンドの甥で、ひとりにはグリーンム、もうひとりにはオーラーヴといい、二人とも立派な人物であった。フラヴンの身内の者みんなにとって、彼が出発してしまうのは、想ってもみなかった損失と思われたが、彼はこう言うのだった。自分はヘルガから何の喜びも得られないため、グンラウグに決闘を挑んだのであり、二人のいずれかが相手の前に倒れねばならないのだと。

その後順風が出るとフラヴンは出港し、船をスラーンドヘイムに入れて冬はここで過ごした。¹ その冬、グンラウグについて何の消息も聞かれなかった。そして夏にそこでグンラウグを待ち、もう一冬スラーンドヘイムに滞在してリヴァングル² という所に居たのであった。

蛇舌のグンラウグは北の方〔メルラッカ〕平原から厄介詩人ハッルフレズといっしょに航海することにしたが、出港が大はばに遅れてしまった。順風が出るとすぐに船出して、冬になる少し前にオークニー諸島に着いた。³

当時フロズヴィルの子スィグルズ公がこの諸島を支配していた。グンラウグは彼のもとに赴き、冬はそこに滞在したが、公はかれを厚くもてなすのであった。そして春に公は遠征の準備をした。グンラウグは、かれと共に遠征した。かれらは夏に南方諸島⁴ とスコットランドの峡湾を荒しまわって、数多くの戦いをした。かれらの行く先々でグンラウグは、もっとも勇敢で不屈の戦士であり、もっとも厳しい男であることを示したのである。

スィグルズ公は夏はやくに帰国してしまったが、グンラウグはノルウェーに行く商人たちの船に乗り、グンラウグとスィグルズ公はあつい友誼のうちに別れた。

グンラウグはエイリーク公に会うため北の方スラーンドヘイムのフラズィルに赴き、冬のはじめにそこに着くのであった。公はかれを歓迎して、自分のもとに居るようにと勧め、彼はこれを承知した。公は以前にグンラウグとフラヴンとの間に起った不仲を聞いていて、自分の所領でかれらが闘うことを禁じたと、グンラウグに語るのだった。⁵ グンラウグは、さようなことは公が決定すべきですと言った。グンラウグは冬の間そこに滞在したが、いつも黙りがちであった。

そして春のある日のこと、グンラウグが外出し、かれの親類ソルケルがいっしょだった。彼らは〔公の〕屋敷から遠いところを歩いていたが、目の前の野原に人垣ができていた。その人の輪のうちには武器をもった男が2人いて、チャンバラをしていた。その一人はフラヴン、もう一人はグンラウグと名乗っていた。⁶ アイスランド人はチョコチョコ斬りあい、約束を果すのがのろいと、居あわせた人たちが言うのであった。グンラウグは、これには大きな嘲りがこめられており、自分に対して大変な侮蔑がなされているのだと分かり、黙ってそこを離れるのだった。

この後しばらくしてからグンラウグは公に、自分はフラヴンと自分との件に関する公の近侍たちの嘲りと侮蔑をもう我慢できないと話し、リヴァングルに行くための道案内をあてがってくれるようにと頼んだ。すでに公には、フラヴンがリヴァングルを発って東の方スウェーデンに行ったということが知られてあったので、彼はグンラウグに出立する許しを与え、その道に要る道案内2人をあてがってやった。

こうしてグンラウグは総勢7人でフラズィルからリヴァングルに行くのである。そしてグンラウグがそこに夕方に着いた同じ日の朝に、フラヴンは総勢5人でそこを発っていた。そこからグンラウグはヴェルダル⁷ に入ってゆき、いつも、フラヴンが前の夜にいた所へ夕方に着くのであった。グンラウグは足を進めて、この谷でいちばん高い所にあるスーラ⁸ と呼ばれる屋敷にやってきた。ここをフラヴンは朝に発っていた。この時グンラウグは足をとめず、すぐ旅を続けた。

そして朝に日の出の頃、かれらは出あったのである。フラヴンは湖がふたつある場所に来ていたが、湖の間には平原があって、それはグレイプニルの原（Gleipnisvellir）と呼ばれていた。一方の湖に、ディンガネスという名の岬が突きだしていた。⁹ この岬でフラヴンたちは抵抗するのだが、彼らは5人だった。フラヴンとは、その従兄弟のグリーンとオーラーヴがいっしょにいた。

かれらが会ったとき、グンラウグが言った、「わしらが出あったとは、結構なことだ」

フラヴンは、それを咎めるつもりはないと言った、「さて条件はおまえの望むようにする。みんなで闘うか、それともわしら二人だけがやるか。どっちも同じ数にしよう」

グンラウグは、どちらでもいいと言った。するとフラヴンの従兄弟グリーンとオーラーヴが、二人が闘っているとき手をこまねいてはいないと言うのだった。グンラウグの親類の黒髪のソルケルもそう言った。

そこで公の道案内たちにグンラウグが言った、「そちたちは見物しておって、どちらにも助太刀せず、われらの果し合いについて伝えるのだ」

彼らは、そのようにした。

それから彼らは闘いを始め、みな勇ましく斬りあった。グリーンとオーラーヴはグンラウグひとりに向かっていったが、その結果はかれが二人とも殺して自分が傷を受けないということになった。このことは、ソールズ・コルベインスソン¹⁰ が蛇舌のグンラウグについて詠んだ詩で裏づけている――

フラヴンをとらえしまえに
闘いにてグンラウグ
うすき剣もて
オーレイヴにグリーンを倒しけり。
かれは雄々しく血にまみれ
ますらお三たりを亡きものとせり、
船の神なる男は
戦士らの死をさだめけり。

その間にフラヴンとグンラウグの親類ソルケルが斬りあい、ソルケルはフラヴンの前にたおれ、命を落した。そして終には、彼らの道連れが皆倒れてしまったのである。

こうして彼らふたりは剣を交え、たがいに大きく打ちあって、断固として攻めあい、たえ間なく激しく闘った。そのときグンラウグはアザルラーズ下賜品の剣を使っていたが、それは最上の武器だった。その剣でグンラウグはフラヴンにとうとう大打撃を加え、フラヴンの脚を斬った。フラヴンはそれでもなお倒れはせず、木の切株によるめき着いて、その切株に身をささえた。

その時グンラウグが言った、「おまえはもう聞えん。わしは片輪のおまえと最早たたかうまい」

フラヴンは答えて言った、「いかにもわしは完全に負かされたが、何か飲物をもらえれば、ま

だ十分やれるぞ」

グンラウグが答えて言う、「では欺すなよ、水をわしの甲にいれて持ってきてやったら」

フラヴンは答えて言う、「おまえを欺すなどはすまい」

それからグンラウグはとある小川に行き、甲に水をすくってフラヴンに持ってきた。しかし彼は左手でそれを受取ろうとして身をのぼしたが、右手の剣でグンラウグの頭に斬りつけ、それはひどく大きい傷となったのだ。

その時グンラウグが言った、「卑怯にもおれを欺したな。おまえを信用したのに、おまえのやり方は男らしくもないぞ」

フラヴンは答えて言う、「その通りだ。だがこうしたのは、おまえに麗しのヘルガの抱擁を受けさせたくないからだ」

そうして彼らはなおも激しく闘ったが、その結末はグンラウグがフラヴンを倒して、フラヴンを命を落すということになった。そのとき公の道案内が進みでて、グンラウグの頭の傷をしばった。その間かれは坐っていて、この詩を詠んだ――

みごとなる軍びと
剣のあらしを呼ばう者なる
フラヴンは闘いのなか勇しく
かわることなく我らにむかいきぬ。
軍の守りてなるひとよ
ここなるホルザルのディンガが崎にて¹¹
この朝まだきグンラウグがぐるり
あまた武器の飛びかうことありき。

それから彼らは死んだ者たちを葬って、その後グンラウグを馬にのせてリヴァングルへ連れてきた。そこで彼は3晩横になり、僧からすべての礼を授けられ、それから息を引取り、その教会に埋葬されたのであった。彼らグンラウグとフラヴンのいずれもがこの事件で命を落したことは、誰にも大きな損失と思われた。

1 1007―08年の冬。

2 Lifangr は、トロンヘイム・フィヨルドの右岸、今日のトロンヘイム市北東に位置する Levanger のこと。

3 1007年晩秋。

4 Suðreyjar は、スコットランドの西に連なる Hebrides のこと。この段に挙げられている地域は、ノルウェー系ヴィーキングの頻繁な遠征をみ、長期にわたって彼らの支配をうけたこともあった。

5 *Grettis saga*, ch. 19 によると、エイリーク公はイングランドに遠征する前に（1015年）、海賊やベル

セルクラ無法者が財産や女を奪って民を困らせるので「ノルウェーにおいてあらゆる決闘を廃止した」(ÍF VII, 61)。

- 6 この擲楡は、*Brennu-Njáls s.*, ch. 8 の記述を連想させる。そこでは、Lundarreykjardalr の少年 2 人が、Hrútr Herjólfsson と Mörðr gígja Sighvatsson の争いを、フルートの前で真似て、屋敷の者たちを笑わせる。その時、モルズになった少年は、フルートの兄 Hqskuldr に鞭でなぐられて顔の皮がむけた。しかしフルート自身は、その少年に指輪を与えて、慰さめ諭して、評判になった。(ÍF XLL, 26—29.)
- 7 Veradal は、Levanger (Lifangr) の北東 10 キロほどにある Verdal のこと。本文で、「グンラウグはいつも、フラヴンが前の夜にいた所へ夕方に着く」といわれているが、この記述は現実の距離からみて、不正確なものとせざるを得ない。
- 8 Súla は、Verdal (Veradal) の西南西 40 キロほどにある Sulastua のこと。
- 9 Dinganes は、どこか確認されていないが、Verdal の湖 Breidvatn のことか。注 11 をも参照。
- 10 Þórðr Kolbeinsson は、アイスランドの詩人で、エイリーク・ハーコナルソン王と聖オーラヴ王に頌歌を献じたと伝えられている。なお彼は、*Bjarnar saga Hitdælakappa* (ÍF III) のヒーローのひとり。
- 11 *hér.....á Horða.....nesi Dinga*. 従来ほとんどの校訂者は、写本の *horda* を *høru* に訂正して、「ここなる固きデインガネスにて」としてきた。しかし、この語を複数形 *Hörðar* 「Hörðaland の民」の属格形と解釈することも十分可能であり、ここではこの考えが採られている。これを肯定すれば、決闘は、散文で物語られている地方とは全く別の西ノルウェーで行われたとも推定できる。

XIII. この事件がここアイスランドに「まだ」伝わっていなかったとき、夏に黒髪のイッルギは夢をみた。¹ そのとき彼は、ギルスバッキの自宅にあった。彼には、グンラウグが夢に現われて、夢の中でこの詩を詠んだように思われた。イッルギは目をさますと、この詩を思いだして他の者にいつてきかせた——

われは知る フラヴンが鎧の
カチンカチンとなる柄ある剣もて我を
斬りしこと さはあれど
するとき刃はフラヴンが脚にくいこみぬ。
そのとき屍をさく禽
あたたかき致命のきずの沼をば味わい、
戦士のたたかひの杖
グンラウグのこうべを割りさきぬ。

同じ夜、南のモスフェルでオヌンドが、全身血まみれになって現われたフラヴンを夢に見るという出来事が起きた。彼「フラヴン」はこの詩を詠んだ——

やいばは赤くそまりしが
戦士は剣もて我をもいたく傷つけぬ

海のあなたにて刃は
盾のうえにて試されぬ。
血にぬれし血の禽
こうべのうえにて血のうちにあり
傷にうえし傷の禿たか
傷の川のなかを動きまわりき。

そして次の夏、大民会で黒髪のイッルギが法の岩でオヌンドに言った、「あんたの息子フラヴンが決闘の中断中に欺したわしの息子の補償として、あんたはわしにどうしてくれるのか」

オヌンドは答えて言った、「ご子息の補償をする義務はないと思う、二人の争いのためにわしはこんなに痛ましい損害をうけたのだから。わしもあんたには息子の補償は何も求めん」

イッルギが答える、「それでは、誰かあんたの親類縁者がその償いをするようになるう」

そして民会ののち夏の間、イッルギはとても塞ぎこんでいた。

秋にイッルギは30人を連れてギルスバッキを出て朝はやくモスフェルに着いたと、言われている。オヌンドと息子たちは教会に逃げこんだが、² イッルギはかれの身内を2人つかまえた。一人はビョルン、もう一人はソルグリームといった。彼はビョルンを殺させ、ソルグリームの脚を切らせた。その後イッルギは家に戻ったが、オヌンドからはこれについて何の仕返しもされなかったのである。

イッルギの息子ヘルムンドは兄弟グンラウグの死をひどく悲しんで、このことが行われたにも拘らず、かれの復讐がされたとは思わなかった。

フラヴンという男がいたが、彼はモスフェルのオヌンドの甥だった。かれは大商人で、フルート峡湾（Hrútafjörður）につながれていた船の持ち主であった。

春にイッルギの子ヘルムンドはたった独りで家を出て、北の方ホルタヴォルザ荒原（Holtavörðuhéiðr）へ行き、さらにフルート峡湾に達して、ボルズェユル（Borðeyrr）の商人たちの船へ向った。そのとき商人たちは、ほとんど出港の準備ができていた。船長フラヴンは陸にいて、多くの者がかれといっしょだった。彼の方へとヘルムンドは向い、これに槍をつき通し、ただちに立去った。彼らフラヴンの仲間はみな、ヘルムンドに仰天するばかりだった。この殺人にたいして何の償いもなされず、このままで黒髪のイッルギとモスフェルのオヌンドの問題は終わったのである。

しばらく経ってから、ソルステイン・エギルスソンは娘のヘルガを、ハッケルの子でソルケル³という男に嫁がせた。彼はフラウン谷（Hraunsdalr）に住んでいて、ヘルガは彼といっしょにその家に移ったが、かれを愛することはあまりなかった。グンラウグが死んだとはいっても、彼女はかれを忘れることができなかったからである。しかしソルケルは人柄は立派で、財産はゆたかであり、立派な詩人だった。かれらは少なからぬ数の子供をなした。かれらの息子はソーラリン、

ソルステインといい、まだもっと子供がいた。

ヘルガの何よりの楽しみは、ゲンラウグの贈物のマントをひろげて長い間眺めていることであった。そしてある時、ソルケルとヘルガの屋敷をひどい病気が襲って、多くの人が長いこと煩った。この時ヘルガも病気になったが、それでも床につくことはしなかった。ある土曜日の夕方、ヘルガは居間にいて、夫ソルケルの膝に頭をのせ、ゲンラウグの贈物のマントを取りにやらせた。そしてマントが彼女のところにくると、身をおこして、マントを目の前にひろげ、しばらく眺めていた。それから夫の腕の中にゆっくりと倒れこんで息をひきとったのである。

その時ソルケルがこの詩を詠んだ――

わが腕のなか
わが美しき妻を
死せるがままに横たえぬ、
御神は女がいのちを奪いたまえり。
.....
.....
夫なるわれには
生きながらうは実につらし。

ヘルガは教会に移されたが、ソルケルはそこに住みつづけた。ヘルガの死は、予想されたように、非常に大きな損失と思われたのである。

そしてそこで、この物語はおわる。

(完)

1 1010年のこと。

2 12世紀前半まで、モスフェルの教会は農場より約1キロ離れた Hrísbú にあったという (cf. *Egils s.*, ch. 86)。本文では、教会が屋敷内にあるかのように述べられている。

3 Þorkell Hallkelsson 彼および彼とヘルガとの子供たちについて、本文以外の資料は何も伝わっていない。